

The relationship between face recognition and behavior in the elderly with cognitive disorders

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Noto, Shinichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/19459

博士論文審査結果報告書

学位授与番号 医博甲第 1705 号

氏 名 能登 真一

論文審査員

主 査(職名) 生田 宗博(教授)

副 査(職名) 柴矢 富士子(教授)

副 査(職名) 二木 淑子(助教授)

論文題目 The relationship between face recognition and behavior in the elderly with
cognitive disorders
(認知障害のある高齢者における相貌認知と行動の関係)

論文審査結果

痴呆性高齢者が急増し今後ますますその数が増加すると予測されているが、その中で求められているのは環境調整や予防的介入といった痴呆性高齢者に対する認知リハビリテーションの確立である。しかしながら、痴呆性高齢者の個々の認知機能と日常生活行動との関係を調べた研究は内外ともに少ない。本研究では、認知障害の中でもとくに日常生活場面に関連のあると考えられる相貌認知について、その認知の程度を調べることと、相貌認知と日常の施設内行動との関係を明らかにすることを目的に研究を行った。

対象は介護老人保健施設に入所する高齢者で、神経心理学的評価によって何らかの認知障害が認められた 43 名とした。まず、相貌認知については、Hodges & Ward (1989) による有名人などをターゲットとした Famous Faces Test の日本版 (JFFT) と入所している施設スタッフをターゲットとした Staff Faces Test (SFT) という 2 種類の評価バッテリーを作成した。これらはそれぞれ判断、同定、命名の各レベルで評価した。一方、日常の行動評価は入所する高齢者に向けて開発された Paracheck Geriatric Rating Scale (PGS) を用い、これはさらに因子分析によってその構造を明らかにした。

相貌認知の評価では、2 種類の評価バッテリー双方において判断、同定に比べて命名がとくに低下し、そのレベルの難しさがあらためて確認された。相貌認知と他の評価項目との関係では、SFT と PGS の相関が $r=0.648$ ($p<0.01$) となり最も強くなった。逆に JFFT と PGS は有意な関係を認めなかった。さらに相貌認知の 2 つの評価について、PGS の因子分析から得られた「個人的活動」、「移動を伴う活動」、「集団活動」の 3 つの因子との偏相関を調べた結果、SFT と PGS の「個人的活動」との関係が $r=0.595$ ($p<0.01$) と強い相関関係となった。

本研究の結果から、認知障害のある施設入所高齢者においては、身近な人間に対する相貌認知の程度と日常生活行動レベルとの関連性が示唆された。

以上より、本研究はリハビリテーション科学領域において、認知障害を持つ高齢者に対するリハビリテーション評価・介入に新たな知見を加え、今後の発展に寄与するものである。